杜甫研究年報

［第六号］

［論文］

杜甫の詩における「山河」の在り方とその変質について——安史の乱の前後を中心に——　遠藤星希　1

杜甫詩の月が照らすもの——　高芝麻子　15

杜甫の自注にみえる編年意識について——「自京赴奉先縣詠懷五百字」以降の展開——　好川聡　31

「家書」は届いたか——杜甫「春望」の「家書抵万金」について——　後藤秋正　45

杜甫「示從孫濟」——門閥意識を生きた詩人——　松原朗　62

『杜詩諺解』の構造とそこに見える解釈の位相　其一——玉華宮から——　成澤勝　87

［訳注］

杜甫「鵰賦」（鵰の賦）訳注（二）——　谷口眞由実　108

杜甫「東西両川説」訳注——　谷口匡　116

［研究概況及び文献収録］

日本新世紀（二〇〇〇—二〇二〇）杜甫研究綜述——　趙蕊蕊（大橋賢一・加藤聰・紺野達也・佐藤浩一訳注）　132

日本における杜甫研究集録（二〇二一）——　大橋賢一・加藤聰・紺野達也　166

日本杜甫学会会則・彙報・編集後記——　168

日本杜甫学会［編］

勉誠出版

『杜詩諺解』の構造とそこに見える解釈の位相　其一

――玉華宮から

成澤　勝

一、はじめに

これまでもっぱら朝鮮における審美の世界を解きほぐす作業に当たってきた。それは、情感抒情の方面に限らず、精神風土や思惟・思弁の様相まで含めた文化やその環境全般といえよう。そうしたものが歴史的に強くまた濃厚に漢土からの巨濤に晒されてきた中で、特に朝鮮の審美の様相を探ろうとすれば、当然そうした漢土的要素を丁寧に剥ぎ取り、朝鮮的要素を紡ぎ出していく作業を避けることはできない。

それは、朝鮮における杜甫の詩の理解・解釈においても同様である。筆者はすでに朝鮮における杜詩解釈を検証するうえで格好の資料となる、朝鮮中期語で解釈・注釈（すなわち諺解）された『分類杜工部詩』二十五巻（以下、『杜詩諺解』という）のテキストの系統について論じたことがあり[1]、その場（以下、前稿という）で同書の概略については紹介してあるので、ここでは改めて論説することは避け、小稿の論旨に必要な最小限をまず提示する。

杜甫の詩一四六七篇が本件『杜詩諺解』として一四八一年に柳允謙ら成宗朝の弘文館臣寮たちを中心に編纂事業が始まり[2]、刊行はその八年後頃とされている。ただ編纂、注解、諺訳等の詳細な分担については判っていない。詩本文のテキスト祖本としては世宗の三男安平大君や辛碩祖らによる『纂注分類杜詩』（以下『纂注』と略称し再度後述する）であることはすでに沈慶昊博士によって明されている[3]。おそらくこれのテキスト纂定を待ちながら、編纂は進められたであろう。いずれの刊行も王朝挙げての一大事業であった。一六三二年に木版で出された重刊本がこの全容を示してくれているのに対して、乙亥銅活字で印行された初刊本は散逸している巻もある。しかしながら、重刊本に比して言語的により整備されていた中期語によって編まれていることから、小稿ではあくまでもこの初刊本による。

一六三二年に木版版として再刊されているが、中期語の規則性からの逸脱等、使用言語（近世語）上解釈を進めていく上での不安定性から、あくまでも中期語による注釈、諺訳に拠らざるをえず、残存巻の数量的な制約はあるものの小稿ではあくまでも初刊本によった微視的にして精細な検証を進める。「微視的」というのは、いずれの詩篇にあっても漢字で構成されている詩語の各字句がいずれも個々の諺解部にどのように反映されているかを解明することである。杜詩本文テキストを構成する漢語は孤立語でありながら、しかしそこには微細にして精細な情緒や感傷、思惑、思弁が織り込まれているはずであるにもかかわらず、これらをそのあるがままを表現するには孤立語としての宿命的限界がある。であるからこそ宋代以後多くの解、釈、注、評類が出された。つまり「享受者の解釈の余地」が残されていたわけである。ところが、日本語と同様に膠着語に分類される朝鮮語、しかもとりわけその中期語にあっては屈折性も有し、表現の精彩さは漢語の比ではない。例えば詠嘆・意志表現、尊卑待遇表現、使役・被役表現、接続条件表現、形態形状濃淡度表現等々である。すなわち、中期朝鮮語に拠る解訳作業によるとすれば、解釈・訳出者の漢語原文に対する独自の解釈も如実に現れ出ていると見ることができる。当然そこには朝鮮的特性が現れ出るのも自明である。

そこで、小稿では筆者の恣意的な要点の抉摘にたよって『杜詩諺解』から朝鮮的理解・解釈を拾い取り、議論することなどは許されず、むしろ『杜詩諺解』全体を提示してその中から同等に問題点を先学諸賢たちと共有し、そこを考察・検討していく作業が当為的に求められる。したがって各詩篇の全体を示し、そこに現れたすべての諺解文を分析的に詳細な検証を行うことから始めなければならない。そしてその過程で必然的に要求されてくる最重要条件が、先述の精細性に加え、訳出の正確さである。つまり、諺解者たちの思念が忠実に反映された邦訳でなければならないということである。この点を担保するために、以下のような構成を試みる。

二、小稿の構成

すなわち、小稿ではまず『杜詩諺解』の詩篇に現れた①**詩本文**②**諺訳部分**③**原注**のそのままを**太字体**で記し置く。次いで④諺訳部分の筆者による邦訳を文語文で示す。文語文で示すのは諺訳自体が詩文調であることもさることながら、口語文に比して文語文は簡略でありつつも、特に訓読書き下し文に用いられていることで馴れていること、更に表記言語として一定の整理がなされていること、論理的記述に適していること等からである。次いで、解釈上の特筆すべき事項があれば⑤備考欄を設け、あるいは「アスタリスク（*）印」を付して論述する。特に朝鮮独自独特な理解あるいは詩本文には明示がない解釈であると判断される部分には⑥サイドラインを付した。次いで、邦訳をしからしめた根拠を精細に提示すべく諺解文における全「詞」「辞」「語尾」類の「音（音韻）」とそれらの概念を逐語・逐辞的に解くべく⑦詞辞音義欄を設け邦訳の正確性を担保した。

『呼称』いま仮に諺解文字と称したが、朝鮮語の文字を現代韓国ではハングルと称する。これは中世には存在しなかった呼称であり、当時の呼称としては「諺文」であって、日本でも通用してきたが、こ

れを韓国では忌避し、また同呼称が「漢文」の称に対するものであることから、筆者も適語とは思わない。『杜詩諺解』が作られる四〇年ほど前、「訓民正音」としてこの民族語の表音文字が制定された。しかし文字名としては概念がやや広すぎる。したがって、筆者は敢えてこれを「正音字」（時に「諺字」）と呼称する。

『音表示』正音字の「音」については、すでに福井玲博士によるローマナイズ表があるが、アスキー記号と重なる部分が多く、現今の電算技術、ネットワーク技術の進んだ社会システムにあっては、当該文章のコンピューター上の処理において、筆記者たちの意図せざるところで不測の電算処理干渉の危険性があること。さらにまた同氏式は正音字を含む漢文解読補助記号の全体を普遍的にカバーしており、『杜詩諺解』程度の狭い枠をはるかに凌駕していることから、本件『杜詩諺解』の欧字変換では福井式を避け、『杜詩諺解』に特化した、基本ラテン字とＩＰＡ拡張文字に頼る。対応表があるが、紙面数制限上、今は載せない。

『用字』漢字はその多くが異体字を有し、現下の出版物はそれらなりの方針を以て印行することを許されている。しかし朝鮮の場合、数ある異体字のなかでいずれを用いるかに大きな意味がある場合がある。まだこの問題に関わる研究すら現れていないが、重大な課題である。たとえば、一定の格式を具えた文章（たとえば正史『實錄』など）では、李氏による朝鮮王朝下では、その独立（一八九七年）までは事大字使用に忠実であった。したがって出版物印行に際して全て略字体にするとか、あるいは全て康熙字典体にするといった方針は避けなければならず、原典籍に従った用字が求められる。

三、先行研究について

韓国においては中期語研究の側面、あるいは高麗李朝での杜詩テキスト刊行研究、杜詩そのものの研究との関りで『杜詩諺解』研究業績は多く出されているが、杜詩理解における朝鮮的特徴の検証に取り組んだ研究は未だ見ない。それは何よりも漢土での杜詩解釈の様相を正確に把握しておかないと可能にならないからである。つまり『杜詩諺解』に連なる漢土での杜詩解釈研究がまったく着手されていないからである。漢土での解釈の歴史を一切視野に入れずに杜詩解釈を試みている中で、その歪さゆえに看過しえない著述があり、小稿最終部「むすびに」において指摘し、小稿其一の範囲内で見えてきた特徴としてまとめる。

四、先行諸注解類

『杜詩諺解』のテキストが『纂注』（すなわち前述の『纂注分類杜詩』）の系統にある旨は前述したとおりである。四代王世宗は一四四三年に集賢殿に対して杜詩の諸家注釈の収集を命じ[4]、『纂注』はその集大成であると考えられている。この完成がいつであったかは未詳であるが、現存最古版は一四八五年の甲辰銅活字版とされている。この編纂に当たって、集賢殿内部で註・釈・解類の処理に当たった担当者たちが、処理するうえで如何なる検討を行っていったかについては知る由もない。ただ現に伝わる『纂注』に見える漢土の多数の注解者については知りうるし、したがって『纂注』が拠った注解のテキストも類推することができる。

『杜詩諺解』では現れてこないものの、『纂注』の注解処理過程が『杜詩諺解』解釈にも反映している可能性は想定できる。よってまずは『纂注』の割注に「某曰」で現れる注解者を網羅的に拾い上げ、名／字／号を区別せず通用に従って羅列（杜詩に対する言及以外は入れず）し、以て『杜詩諺解』での杜詩解釈系統の想定に供する。

すなわち『纂注』は杜甫（公自註）、王洙、王十朋、郭知達、王安石、蘇東坡、黄山谷、范温、范仲淹、趙次公、朱子、蔡夢弼、歐陽脩、徐居仁、黄希、黄鶴、潘大臨、潘大觀、杜修可、杜田、師尹、余葵、張炎、魯訔、晁叔用、師古、徐俯、洪蕡、程演、卞圜、孫季昭、王彦輔、蔡伯世、馬子才、杜定功、鄭文宝、曾噩、胡仔、劉履、饒節、晏殊、呂大防、杜定功、鮑(包)文虎、薛蒼舒、李覯、胡仔、薛夢符、梅堯臣、王深父、王琪、楊符、馬存、蔡天啓、謝無逸(已)、唐子西、王禹偁、孟康、何覬、沈括、王立之、石敏若、韓駒、夏倪、范椁ら(注者名中「存曰」は誤字、「胡仔曰」が正しい)をいう。まずは彼らの注解を収める先行杜詩集を点検することに依り、『杜詩諺解』に連なる注解の系統を押さえておくことができる。朝鮮独自独特の杜詩理解の把握はその上でということになる。彼らの注解類を収める杜詩集は以下のとおりである。

①九家集注杜詩三十六巻　『九家』と略称する
②集千家註杜工部詩集二十巻　『集家』と略称する
③黄氏補注杜詩三十六巻　『黄補』と略称する
④新定杜工部古詩近体詩先後并解　『次公』と略称する
⑤杜工部草堂詩箋四十巻　『草堂』と略称する
⑥集千家註分類杜工部詩二十五巻　『分類』と略称する
⑦集千家註批点杜工部詩集二十巻　『批点』と略称する

①～③は『四庫全書』版、④は『杜詩趙次公先後解輯校』（上海戸籍出版社）、⑤は北京大学図書館蔵密陽府刊『草堂詩箋』（天理図書館所蔵本も同版）、⑥は内閣文庫版、⑦は京都大学所蔵版及び米沢図書館所蔵版を、それぞれ見た。なお①の所注は字句の若干の異同があってもほぼ③に、②はほぼ⑦に収まる。

ただし、一応言及しておくべきは、『纂注』には、叙上の漢土の注解者らの注釈以外に、その並びで「補注」なるものが掲げられており、これは別途稿を改めて検証論究する必要があろうが、少なくとも「朝鮮独自独特の理解・解釈」と見られるべきものではない。漢土の注解類の纂定後に追加された補充注乃至『纂注』の朝鮮側編纂者たちによる叙上の漢土注解の補助説明乃至公約数的要約説明である。

また、筆者は杜詩の専家ではなく、むしろ多くの杜詩専家諸賢に『杜詩諺解』の構造に関わる本論考の閲読を仰いだうえで、そこから「朝鮮独自独特の理解・解釈」の発見を期待し、小稿をしたためるものである。したがって、以下に少しく披歴する筆者なりの「朝鮮独自独特の理解・解釈」観はあくまでも現象摘示的なものである。

五、詩篇の詳察

『杜詩諺解』初刊本から、今後可能な限り多くの詩篇に対して分析検証を実施していかなければならない。巻六から始めるが、紙面の制約上小稿では「九成宮」以下の検証は別の機会とし、まず一定量の課題を提供してくれるその「玉華宮」の点検を試みる。

『凡例』

① 小稿は中期朝鮮語文法・語法を体系的に説こうとするものではない。あくまでも、十五世紀朝鮮の諺解版『分類杜工部詩』初刊本を、その解釈面から説明することに徹する。

朝鮮語学乃至言語学を専門としない読者の便宜のために朝鮮中期語の語法面からの最小限の説明を【補説】で試みる。しかし汎用性が担保されているものではない。すなわち諺解文の理解補助的説明であって、詳細な弁別は省き、また朝鮮語作文への還元は目指さない。

② 日本語語法体系とは異なった概念で朝鮮語を説明する説もあるが、ここでは日本語に掛けて理解を進めうるように、朝鮮語と日本語の類似性を可能な限り利用して説明を展開する。

③ 用言は、その基本形が現代語と同じものについては、改めて現代語をも示すということはしない。また、逐次語毎・辞毎に解釈を付して、それらを辿るだけで訳文がを作り上げられるように編んだ。

④ 朝鮮語の音節は、子音-母音-子音の組み合わせである。最初の子音を初声と云い、続く母音を中声と云い、最後の子音を終声と云う。基本的にこれら三部分で構成され、これを閉音節と云うが、この終声の無い音節があり、これを開音節と云う。さらに中期語では後続語尾によっては開音節に一定の終声が付く場合があり、本件『杜詩諺解』にも多見する。ex. 나→나ㄹ(後掲0139)。

また、用言の語幹が終声を持つ閉音節語幹を子音語幹と云い、終声を持たない開音節語幹を母音語幹と云う。そして特に終声がㄹrの場合これをㄹ語幹といい、独特の性質を持つ。

⑤ 諺解本文自体が中期語による詩歌形式を採っていることから、邦訳も簡潔な文語に拠り、且つ可能な限り詩歌調を以て綴る。主格助詞は「の」乃至体言単独（すなわち格助詞無し）で受け、所有格・属格助詞は原則「が」あるいは「つ」で受け、時に「の」を使う。

⑥ 諺解本文に用いられる漢字は邦訳でもそのまま生かし、朝鮮中期語部分はあくまでも仮名で表記する。その漢字該当部分は補助的に（ ）内に新字体漢字を記す。

⑦ 【詞辞音義】欄の日本語は訳語の候補を掲げたものであり、複数掲げることによって当該十五世紀諺解語彙の意味概念に対するイメージの鮮明化を期した。また邦訳語部分も、必要に応じて現代口語をも掲げ、理解の補助とした。

⑧ 文語文であることを明示すべきところは歴史的仮名遣いとした。現代語に関わる綴字、音韻、意味概念等はすべて〈 〉の中に示す。

また、現代語の提示は、朝鮮中期語を説明するにあたり必要とされる最少限に留める。

⑨ ㈱の後に基本形乃至文節内の基幹語を示す。参照指示記号「↓」は【補説】欄の番号を、また「☞」は他の【詞辞音義】番号を指す。

⑩ ／(全角スラッシュ)は、「または」を表す。

『詩篇分析』

玉華宮

第一句

溪回松風長

시내횟돈ᄃᆡ솕ᄇᆞᄅᆞ미기리부ᄂᆞ니

sinai hoisdon dʌi sors bʌrʌmi giri bunʌni

たに(渓)の おお(大)ぞり(反)に ま(曲)がれる ところ(所) まつ(松) かぜ(風)の なが(長)く ふ(吹)けば

【原注】

言溪丨回遠故ㄹ松風이不歇也丨라

言溪ㄱ回遠故ㅁ松風ᄆᆡ不歇也ㅣ라

言、溪ノ回遠故ニ松風ノ不歇也ナリ。

【備考】

原注は『分類』及び『劉批』における梅堯臣の注をそのまま摘載した『纂註』の注から抄出し、これに吐を施した懸吐文である。

『分類』『劉批』所引の梅堯臣注：聖兪曰玉華宮近有晉ニ苻堅墓前有溪曰醽醁蓋取溪色如酒色之碧也溪回言回遠也惟回遠故松風不歇

【詞辞豆義】

0001.시내 sinai：たに(渓)。→[001]。

0002.ㅣ i：前項の시내 sinai には主格語尾ㅣ i（〜の）が吸収(内包)されている。以て、0005項に説く体言ㄷᆡ dʌi(ところ)を修飾する連体修飾節を作っている。連体修飾節内の主格は格語尾ㅣ i／ㅣᄆᆡ ᄆᆡ で受ける。→[019]、凡例⑤。

0003.횟ᄃᆞᆫ hoisdo：㊟횟돌다 hoisdorda または(回)る、めぐ(巡)る。→[004]。この ㄹ 語幹횟돌 hoisdor から終声 ㄹ が脱落。→[005]。

0004.ㅡn：（動詞ㄷᆞᆫ系形形+)る〜、（動詞未然形+)たる〜、ける〜、し〜。→[006]&[015]。

0005.ㄷᆡ dʌi：ところ。〈데 dai所、場所〉。→[003]。この第一句五字は、上二字がㄷᆡ dʌi を修飾する連体節と見て、下三字の文の部分化された複文構造になっていると見る第一解釈。あるいは、これをㅌᆡ dʌi（付属語）と見て、現代語接続語尾〈+ㄴ 데〜したところ(接続助詞)〉と解し、上二字、下三字の重文構造と見る第二解釈。ここでは前者。

0006.솔 sor：まつ(松)。

0007.+ㅅ s：（文節形+)が、の。〈〜の〉。属格体言語尾。→凡例⑤。

0008.ᄇᆞᄅᆞㅁ bʌrʌm：㊟ᄇᆞᄅᆞᆷ bʌrʌm かぜ(風)。この終声ㅁ m が主格語尾ㅣ i に吸収されて、その初声となる。すなわち、終声の次音節初声化である。→[053]。

0009.ㅣ i：〜の。主格語尾。〈+ㅣ ᄆᆡ〜が〉。→[019]、凡例⑤。

0010.기리 giri：なが(長／永)く。

0011.ᄇᆞ bu：㊟ᄇᆞᆯ다 burda 吹く。この語幹ᄇᆞᆯ bur から終声 ㄹ r が脱落。→[005]。

0012.+ㄴ nʌni〜すれば、〜ければ、〜なれば。→[007]。

第二句

蒼鼠竄古瓦

프른쥐녯디샛서리예숨ᄂᆞ다

purun jui niais disais sori ᄆᆡai sumnada

あを(蒼)き ねずみ(鼠) いにしへの かはら(瓦) かさ(重)なるはざまに かく(隠)る

【詞辞豆義】

0013.프ᄅᆞᆫ purun：㊟프ᄅᆞᆫ다 puruda あほ(蒼／青)し。この語幹。

0014.+ㄴ n：（形容詞+)き〜 〈〜い〜、〜な〜〉。→[006]&[015]。

0015.쥐 jui：ねずみ(鼠)。

0016.녯 niais：むかし(昔)の、せきじつ(昔日)の、いにしへ(古)の。

0017.디새 disai：かはら(瓦)。
0018.+ㅅs：〈文語形±〉～が、～の。『0007』。→凡例⑤。
0019.서리 səri：あひだ(間)、はざま。特に同じものが多く並ぶそれぞれの間隙の中。『諺解』独自の解釈を交えた。
0020.+에 φiəi：～に、～へ。→[008]。
0021.숨쉼 sum：㊟숨다 ひそ(潜)む、かく(隠)る。この語幹。
0022.+ㄴ다 nʌda：～す。〈+ㄴ다 nunda〉。動詞現在終止形→[009]。

第三句

不知何王殿
아디몰ᄋᆞ리로다어ㄴ님ᄀᆞᆯ宮殿고

φadi modhʌriroda φənu nimgums 宮殿 go
し(知)り うべくもなし いづれが わう(王)の 宮殿なるや

【詞辞意義】
0023.아 φa：㊟알다φarda 知る、かい(解)す。この語幹알φarから終声ㄹr が脱落。→[005]。→[010]。
0024.+디몰ᄋᆞ dimodhʌ：㊟+디몰ᄋᆞ다 dimodhʌda～(し)えず、あたはず。〈+지 못하다ji motada～しえない、～できない〉。→[011]。「不可能」という扱いは『杜詩諺解』独自の解。
0025.+리로다 riroda：～せむ、～らむ、～べし。→[013]。予想形を用いる。
0026.어ㄴ φənu：どの、いずれの。
0027.ㄱᆞᆷ nimgum：わう(王)、あるじ(主)、しゅくん(主君)。
0028.+ㅅs：～が(属格助詞)。〈～の〉。『0007』。→凡例⑤。
0029.+고 go：～なるや、～するや。→[039]。

第四句

遺構絶壁下
기튼지슨거시 노ᄑᆞᆫ石壁ㅅ아래로다

gitum jizum gəsi nopʌn 石壁 s φarairoda
いま(今)にのこ(遺)れる かま(構)へし ものの たか(高)き 石壁が
した(下) なるかな

＊「石」は『諺解』独自の解釈である。

【詞辞意義】
0030.기ㅌ gi：㊟길다 gida のこ(遺)る、いま(今)につた(傳)はる。この終声ㅌt の初声化。→[053]。
0031.+ㄴ um：(形容詞+)～き～。〈～い～、～な～〉。(動詞+)～(せ)る～、～たる～、～ける～。→[006]&[015]。
0032.지ㅅ jizu：㊟짇다 jizda〈他動詞〉た(建)つ〈建てる〉、きづ(築)く、かま(構)ふ、こし(拵)らふ。〈짇다 jisda 建てる〉。〈지ㅇ｜〉+ㄴ＝〈지ㅇㄴ〉→[014]。
0033.+ㄴn：(動詞)～る～、～たる～、～ける～。〈～た～、～んだ～〉。→[006]&[015]。
0034.것 gəs：㊟것gəsもの、こと。この終声ㅅs が、次項の主格語尾+ㅣi に吸収されて、一音節をなす。→[053]。
0035.+ㅣi：～の。〈+ㅣφi～が〉。『0009』。→[019]。凡例⑤。
0036.노ᄑ nop：㊟높다 nopdaたか(高)し。この終声ᄑp が、続く音節+ㄴʌn(次項)の初声 ㄴʌ に吸収され一音節をなす。→[053]。
0037.+ㄴʌn：～き～。〈+ㅡφum～い～〉。→[006]&[015]。
0038.+ㅅs：(文語形±)～が、～の。『0007』。→凡例⑤。

0039.아래 ɸarai：した／しも／もと(下)。
0040.+모다 roda：～なるかな、～きかな、～るかな。→[024]。

第五句

陰房鬼火青

어 듸ᄒᆞᆫ房앤귓거ᄉᆡ븨리ᄑᆞᆯᆞ고

ɸədughʌn 房 ɸain guisgəsui buri pʌrʌgo

くら(暗)き 房(部屋)には ししゃ(死者)が ひ(火)の あを (青)く

【詞辞意義】

0041.어듸ᄒᆞᆫ ɸədughʌ：㊟어듸ᄒᆞᆫ다ɸədughʌda くら(晦／暗)し。〈薄暗い〉。この語幹。→[044]。→[012]。
0042.+ㄴ n：(形容詞)～き～、～なる～、～たる～〈～い～、～な～〉。(動詞)～る～、～たる～、～ける～。→[006]&[015]。
0043.房：ᄉᆞᆨ や(部屋)、ま(間)。
0044.+애 ɸai：～に、～ᄉᆞ。〈+애 ɸai〉。→[008]。
0045.+ㄴ n：～は。→[017]。
0046.귓거ᄉᆞ guisgəs：㊟귓거ᄉᆞguisgəs しにびと(死人)、ししゃ(死者)。←귀(鬼)ᄌᆞ：鬼神(死者の称)。終声の次音節初声化→[053]。
0047.+ㅣ wi：～が。〈+이 ɸwi～の(属格語尾)〉。→[018]、凡例⑤。
0048.ᄇᆡᄅᆞbur：㊟ᄇᆞᆯbur ひ(火)、ともしび(灯火)。終声の次音節初声化→[053]。
0049.+ㅣ：～の。〈+이 ɸi～が〉。☞0009。→[019]、凡例⑤。
0050.ᄑᆞᆯᆞ pʌrʌ：㊟ᄑᆞᆯᆞ다pʌrʌda あほ(藍/青)し。cf.0013。
0051.+고 go：～しく、～なりて、～(し)て、〈動詞連用形単独〉。→[020]。

第六句

壞道哀湍瀉

믈어딘길헨슬픈므리ᄒᆞᆯᆞ놋다

murɸədin girhain surpʌn muri hurʌnosda

いた(傷)める みち(道)には かな(哀)しき みず(水)の ながれ(流)るるかな

【詞辞意義】

0052.믈어디 murədi：㊟ᄆᆞᆯᆞ어다다 murədida こは(壊)る、くづ(崩)る。〈믈어지다 murəjida 崩れる、傷む〉。この語幹。
0053.+ㄴ n：(動詞±)～る～、～たる～、～ける～。→[006] &[015]。
0054.길ᄒᆞ girh：㊟길ᄒᆞ みち(道)、道路。〈길〉。次音節の初声がゼロɸで、中声 ㆍ ə が ɸh に着いて一音節を構成する。→[053]。
0055.+ㅣ ain：～には。☞0044、0045。→[008]、[017]。
0056.슬프 surpʌ：㊟ᄉᆞᆯᄑᆞ다 surpʌda かな(悲／哀)し。この語幹。
0057.+ㄴ n：(形容詞±)～き～、～かる～。〈～い～、～な～〉。(動詞)～る～、～たる～、～ける～。→[006]&[015]。
0058.므리 mʌr：㊟ᄆᆞᆯmʌr みづ(水)。終声の次音節初声化→[053]。
0059.+ㅣ：～の、体言単独で主格。〈+이 ɸi～が〉。→[019]、凡例⑤。
0060.흐르 hʌrʌ：㊟흐르다 hʌrʌda なが(流)る。この語幹。
0061.+놋다 nosda：～(し)ていること+〈〉。→[037]。

第七句

萬籟眞笙竽

여러가짓소리眞實ㅅ뎌와피릿소리ᄀᆞᆫ도소니

ɸiərəgajis sori 眞實s diəɸoa piris sori gʌddosoni

もろもろの　おと(音)　眞實(まこと)の　よこくだ(横管)と　たてぶえ(縦笛)が　こゑ(声)の　ごとくなれば

【原注】

萬籟ㄴ山谷ㅅ·ㅅ옛ㅂ·ㄹ○?○?○?여러소리라

萬籟nʌn 山谷sʌziβiəisbʌrʌm○?○?○?βiərəsorira

萬籟ハ山谷ノ間ヘノ風◇?·◇?·◇?諸々ノ音ナリ

【備考】

原注に印字混乱による解読不能字があるのが惜しまれるが、「山谷の間の諸々の音」という釈解は『諺解』の先行註解類(『草堂』『分類』『劉批』『纂注』)には現れない。諺解者の判断に依ったか。因みに『九家』のみその第七句は「天籟真笙竽」とされる。この「天籟」を説いて南郭子綦が「夫吹萬不同」となした注(『黄補』『集家』『批点』)に拠ったか。

【詞辞音義】

0062.여러βiərə··さまざまなる〜。〈いろいろな〉。

0063.가지gaji··たぐ(類)ひ、ことごと。〈種類〉。

0064.+ㅅs··〜なる〜。〈〜の〉。連体修飾格を作る語尾。属格〈〜に属する〉でも同格〈〜であるところの〉でもない。

0065.소리soni··おと(音)、こゑ(声)。

0066.뎌diə··横笛。→[021]。

0067.+와βoa··〜と〜。並列の体言語尾。→[022]。

0068.피리piri··縦笛。→[021]。

0069.ㄷgʌd··本ㄱㄷ다gʌdda ごと(如)し、おな(同)じし。

0070.+ㅌ소니dosoni··〜にして、〜たれば。→[042]。

第八句

秋色正蕭洒

ㄱ·ㅅ을비치正히ㄱㅅㄱㅅ·도다

gʌzʌrs bici 正hi gʌsgʌshʌdoda

あき(秋)の　ひかり(色光)こそ　正(まさ)しく　きよ(清)けれ

【詞辞音義】

0071.ㄱ·ㅅ·ㅁgʌzʌr··本ㄱ·ㅅ을gʌzʌrs あき(秋)。

0072.+ㅅs··〜の、〜つ、〜が(属格助詞)。〈〜の〉。→凡例⑤。☞0064。

0073.비ㅊbic··本빛bic「ひかり(光)」が基本的概念。他に、あか(明)り、いろ(色)、いろあ(色合ひ、ふぜい(風情)など。巻六だけで、詩テキストに「色」は少なくとも十五か所に確認できるが、いずれも訳語は빛bic である。また、빛bic の対応テキストとしては「色」以外に「光」「日」「曛」「景」および物質の属性としての「翠」など。

0074.+ㅣi··〜の。〈+ㅇβi〜が〉。→[019]、凡例⑤。

0075.+ㅎhi··〜く、〜しく、〜に。→[023]。

0076.ㅅ·ㅅ·ㅎ·gʌsgʌshʌ··本ㄱㅅㄱㅅ·ㅎ·다gʌsgʌshʌda きよ(清／浄)し。

0077.+ㄷ다doda··〜かな、ぞ〜用言連体形、こそ〜用言已然形。→[024]。

第九句

美人爲黃土

고온사ㄹ·미누른흘기ㄷ·외니

goβon sarʌmi nurʌn hʌrgi dʌβoini

うつく(美)しき　ひと(人)の　あか(黄)き　つち(土)と　なれば

【詞辞音義】

0078.고오 gofo：�本고ᄇᆞ다 gowda うるは(麗)し、うつく(美)し。〈고ᄇᆞ다 gobda〉。

0079.+ㄴ n：〈形容詞〉～き～、～なる～〈～い～、～な～〉。〈動詞〉～る～、～たる～、～ける～。→[006]&[015]。

0080.사ᄅᆞ ɔsaraɴ：�本사ᄅᆞᆷ saraɴ ひと(人)。

0081.+ㅣ i：～の。〈+이 fi～が〉。→[019]、凡例⑤。

0082.누르 nuru：㊞누르다 nuruda あか(黄)し。〈누러ᄅᆞ다 nurəta きいろい、暗めにきいろっぽい〉。

0083.+ㄴ n：〈形容詞〉～き。☞0079。

0084.ᄒᆞᆯㄱ hʌrg：㊞ᄒᆞᆯㄱ hʌrg つち(土)。

0085.+ㅣㅂ.이다 idʌɸoi：㊞+ㅣㅂ.이다 idʌɸoida～になる、～となる。この語幹。〈+이 되다 idoida〉。

0086.+ㄴ ni：～(す)れば、～なれば、～ければ。→[025]。

第十句

況乃粉黛假

ᄒᆞᆫ.ᄆᆞᆯ며 粉黛ᄅᆞᆯ비러ᄡᆞᆫ.던거시ᄯᆞ.녀

hʌmʌrmiə 粉黛rʌr birə bsudən gəsi sdʌniə

いはんや 粉黛を か(借)り もち(用)ゐたるに おいてをや

【原注】

言美人이已爲黃土ᄒᆞ.니況其平日假用塗面之粉黛乎ㅣᄯᆞ.녀

言美人 fi已爲黃土 hʌni 況其平日假用塗面之粉黛乎 isdʌniə

言、美人ノ已爲黃土ナレバ況其平日假用塗面之粉黛乎ヲヤ

【備考】

原注のこの解釈は、『纂注』を含む先行諸本には無く、『杜詩諺解』編纂の過程で付されたと見なすことができる。

原注のこの解釈は、『纂注』を含む先行諸本には無く、『杜詩諺解』編纂の過程で付されたと見なすことができる。

【詞辞音義】

0087.ᄒᆞᆫ.ᄆᆞᆯ며 hʌmʌrmiə：いはん(況)や。→[026]。

0088.+ᄅᆞᆯ rʌ：～を、～に。→[027]。

0089.비러 birə：㊞빌다 birda か(借／假)る。この語幹빌に+ㅓ ə で連用形(→[031] ＝第Ⅲ語基)。

0090.ᄡᆞᆫ bsu：㊞ᄡᆞᆫ다 もち(用)ゐる、つか(使)ふ。この語幹。

0091.+던 dən：～せる～、～(し)をりし～。〈～(し)ていた～〉。→[028]。

0092.거ㅅ gəs：㊞것 gəsもの、こと。☞0034。終声の次音節初声化→[053]。

0093.+ᄯᆞ.녀 isdʌniə：～をや。{ᄒᆞᆫ.ᄆᆞᆯ며～+ㅣᄯᆞ.녀}→[026]。

第十一句

當時侍金輿

그時節에金輿ᄅᆞᆯ侍衛ᄒᆞ.던

gu 時節fəi 金輿rʌr 侍衛hʌdən

その 時節に 金輿を 侍衛しをりし

【原注】

金輿ㅅ天子ㅅ所乘車ㅣ라

金輿 nʌm 天子 s 所乘車 ira

金輿ハ天子ガ所乘車ナリ

【備考】

【詞辞音義】

0094.ㄱgɯ：それ、その、かれ、かの。指示詞。→[029]。

0095.時節：おり(折)、ころ(頃)。

0096.+에 φai：～に。時間や期日を示す格語尾。→[008]。

0097.+ㄹrɯr：～を、～に。→[027]。

0098.ᄒᆞ hʌ：(本)ᄒᆞ다 hʌda す。→[044]。

0099.+ᄃᆞᆫdən：～せる～、～(し)をりし～。〈～(し)ていた～〉。→[028]。☞0091。

第十二句

故物獨石馬

녯거슨ᄒᆞ올로잇ᄂᆞᆫ돌ᄆᆞ리로다

niəis gəsɯn hʌφorro φisnʌnin dormʌr iroda

いにしへが ものは ひと(独)り へめぐ(経巡)りし いしめ(石馬)かな

【備考】

「獨」について「今は故物となっている石馬が昔日には独り金輿に侍して経巡っていた」と解する。『纂注』が『分類』所載の蘇軾注「石馬在茂草中」を引くが『諺解』はこれも採らない。『草堂』『劉批』には言及がない。『杜詩諺解』における看過すべからざる解釈事実であり、続く「むすびに」において詳論する。

【詞辞音義】

0100.녯ᄉᆞniəis：むかし(昔)の。いにしへ(古)の。☞0016。

0101.것gəs：(本)것gəs もの、こと。☞0034。

0102.+ㅣɯn：～は。〈+ᄋᆞφɯn〉。☞0045。→[017]。

0103.ᄒᆞ올로hʌφorro：ひと(独)りで、単独で。

0104.ᄋᆞ+ᄒᆞφis：すがらに、ぞろぞろ、づづっと。連なる様子、連続している様を表す接頭辞。

0105.ㅣᄂᆞᆫnʌnin：(本)ㅣᄂᆞᆫ다 nʌnida めぐ(巡)りある(歩)く、とびあるく。

0106.+ㄴn：(動詞)～る～、～たる～、～ける～、～し～。〈～た～、～だ～〉。→[006][&[015]。

0107.돌dor：いし(石)。

0108.ㅁmʌr：(本)ㅁmʌr 馬。終声の次音節初声化→[053]。

0109.+ㅡ로다 iroda：～なるかな。詠嘆の語尾。☞0040。→[024]。

第十三句

憂來藉草坐

시름오매프를지즐안자셔

sirum φomai purɯr jijɯr φanjasiə

うれひ(憂)の き(来)たれば くさ(草)をば へ(圧)しざ(坐)して。

【詞辞音義】

0110.시름sirum：きが(気掛)かりごと、うれ(憂)ひごと、なや(悩)みごと。体言単独で主格ともなりうる。

0111.오φo：(本)오φo다 φoda く(来)。〈来る、やって来る、寄せて来る〉。

0112.+ㅁm：～(する)こと。→[030]。

0113.+ㅐai：～によ(因／由)り。→[035]。

0114.프purɯr：(本)풀ᄒᆞ다 purɯrda くさ(草)。終声の次音節初声化→[053]。

0115.+ㄹɯr：～を、～に。→[027]。

0116.지즐jijɯr：(本)지즐다 jijɯrda へ(圧)す、お(押)しの(熨)す、あっ(圧)す。〈지지르다 jijiruda 圧する、抑えつける〉。この連用形(→[031])。

0117.안ᄃᆞφanj：㊟앉다 φanjda ざ(坐)す、ざ(座)につ(着)く。〈座る〉。この語幹。

0118.ㅓㅏ셔 asiə：～(し)て、動詞連用形単独、～(し)をき。→[031]。

第十四句

浩歌涙盈把

훤히 놀애 블로니ᄂᆞᆫ믈리소내ᄀᆞᄃᆞᆭᄋᆞ도다

huənhi norφai burroni nunsmuri sonai gʌdʌghadoda

ひろ(浩)かれと うた(歌)ひをれば なみだ(涙)の て(手) にぞ み(満)ちたる

【原注】

盈把ᄂᆞ揮涙而滿把也ㅣ라

盈把ㄴʌn 揮涙ㅁ滿把也ㅣira

盈把ハ揮涙ㅁ滿把也ナリ

【備考】

原注のこの解釈は、『纂注』を含む先行諸本には無く、『杜詩諺解』編纂の過程で付されたと見なすことができる。

【詞辞意義】

0119.훤히 huənhi：かすかながらあき(明)らかに。ひろ(広)くとど(屆)きわたるがごとく。→[032]。

0120.놀애 norφai：うた〈歌／唱〉、〈ᄂᆞ래 norai〉。

0121.블믈다 burruda よ(呼)ぶ、うた(歌)ふ。この語幹。

0122.+ㄴ니 oni：～すれば、～したれば。〈～すると〉。→[033]。

0123.ᄂᆞᆫ믈 nunsmur：㊟ᄂᆞᆫ믈 nunsmur なみだ(涙)。終声の次音節初声化→[053]。

0124.+ㅣ i：～の。〈+이 φi～が〉。→[019]、凡例⑤。

0125.손ㅣ son：㊟손 son て(手)。終声の次音節初声化→[053]。

0126.+ㅐ ai：～に。→[008]。

0127.ᄀᆞᄃᆞᆭᄋᆞ gʌdʌghʌ：㊟ᄀᆞᄃᆞᆭᄋᆞ다 gʌdʌghʌda み(満／充)つ。

0128.+도다 doda：～かな、ぞ～用言連体形、こそ～用言已然形。→[024]。

第十五句

冉冉征途閒

어른어른녀ᄂᆞᆫ길ᄉᆞ시예

φərunφərun niənʌngirs sʌziφiəi

と(疾)くと(疾)く ゆ(行)きす(過)ぐる みち(道)の ま(間)に

【詞辞意義】

0129.어른어른 φərunφərun：と(疾)くと(疾)く、すみ(速)やかに。〈さっさと、どんどん〉。時の速く過ぎゆくさま。

0130.녀니 niə：㊟녀다 niəda ゆ(行)きすす(進)む、とほ(通)る。〈行きつづける〉。この語幹。

0131.+ㄴ nʌn：～する～、～(し)をる～。〈～している～〉。→[034]。

0132.길 gir：みち(道／路)。cf.0054。

0133.+ㅅ s：～が、～の。☞0007、凡例⑤。

0134.ᄉᆞ시 sʌzi：はざま、あひだ(間)。

0135.+예 φiəi：～に、～へ。〈+에 φəi〉→[008]。

第十六句

誰是長年者

뉘이나ᄒᆞᆯ기리살사ᄅᆞᆷ고

nui φi nahʌr giri sar sarʌmgo

た(誰)そ この よはい(年齢) を ながく い(生)くる もの(人)は

【原注】

此ㄴ深嘆人生之有限하ㄴ라

此nan深嘆人生之有限hanira

此ハ深嘆人生ノ有限スルナリ

【備考】

原注のこの解釈は、『纂注』を含む先行諸本には無く、『杜詩諺解』編纂の過程で付されたと見なすことができる。

【詞辞音義】

0136.ㅜnu：たれ(誰)。

0137.ㅡi：～の。〈ㅓㅇ φi～が〉。→[019]、凡例⑤。☞0002。

0138.ㅇ φi：これ、この～。指示代名詞とも、また連体格接頭辞ともなる。→[029]。

0139.나 ᵊnahr：本나ᵊnah よはい(年齢)。名詞として単語(単独)ではㄴ。

0140.+ㄹ ʌr：～を、～に。→[027]。

0141.기리 giri：なが(長／永)く。☞0010。

0142.사 sa：本살다 sarda い(生)く、す(住)まふ、くら(暮)す。この ㄹ 語幹の終声ㄹ r が、続く連体格の用言語尾ㄹ(次項0143)の前で脱落。

0143.+ㄹ r：～(す)べき～。用言の連体格を作る語尾。→[051]。

0144.사ㄹ sarʌm：ひと(人)、にんげん(人間)、もの(人物)。

0145.+고 go：～なるや、～するや。→[039]。☞0029。この疑問の含意は初字「ㅜ誰」に移し、これに格助詞「～そ」を補った。

六、むすびに

小稿を、「序論」「結論」といった論文構造にしなかったのは、題目で提示した「解釈の位相」なるものが杜甫の詩篇の一・二首だけの分析から見えてくるものではないからであり、今後更なる数量の詩篇の正確な検証を進めていく計画のもと、小稿ではとりあえずの「開始の言」として「はじめに」と記した。ゆえにこの小稿「其一」においては、「結論」ではなく、「むすびに」で締めた。したがってここで述べうるのは現段階で可能な解釈の一様相である。ただ、一方の事実として、朝鮮には、特に王朝レベルで杜詩への総体理解・認識が存在した。杜詩への普遍的な一定の芸術的評価は別に確立しているのかも知れないが、しかし、仮にそうであったとしても十五世紀の朝鮮ではそこを超越していたともいえよう。それは、筆者がここで論証する以前の問題であって、当の十五世紀の段階で刊行を担った者らがすでに明示している。たとえば、後に触れる本件『杜詩諺解』の両「序」である。いずれかの段階においてこれも考証を加えながら論述しなければならないが、今はこの(両「序」所説の)事実の上に立って、現段階での論説を試みる。

それは、今般「其一」として採り上げた「玉華宮」の第十二句「故物獨石馬」に確認できる、十五世紀朝鮮の『杜詩諺解』の解釈者たちが意図的・確信的に漢土の諸解釈と異にした特徴的見方である。

世宗朝に、それまでの杜詩の諸家注釈の収集が命じられたと前述(注④参照)したように、一四四三年には王朝挙げての大事業「杜詩先行注解類の収集」が集賢殿において開始され、これ以後、朝廷にお

ける杜詩研究は一挙に熱を帯びてくる。そしてその成果として『纂注』が出された。現に、先述(四、先行諸注解類)のように多くの注解者たちの膨大な量の解釈や認識が摘載されている。まさに、王朝においては学杜者の「拠るべき権威」でもあった。にもかかわらず、その『纂注』における「蘇曰」の明示を受けながらも、『杜詩諺解』「玉華宮」上掲当該第十二句(故物獨石馬)は「いにしへ(古)がものはひと(独)りへめぐ(経巡)りしいしめ(石馬)かな」[5]すなわち「ただ独り巡り歩いた馬」と解釈している。すでにそこの【備考】で論じたように明確に『纂注』が拠ろうとした『分類』所引の蘇軾注の単なる「獨石馬在茂草中」をば遥かに超えた認識を示している。因みに『黄補』所引の梅堯臣注も『分類』と同記事である。周采泉氏が疑うように[6]仮に『分類』が偽書であり、かつこの「蘇注」が「偽蘇注」であったとしても、現実として『纂注』は「蘇」字のみを陰刻強調しつつ「蘇曰〈中略〉無故舊碑文考驗往事獨石馬在茂草中(故旧の碑文無く、往事を考験すれば独り石馬のみ茂草の中に在せり。」としっかり摘示している。まさしく『杜詩諺解』のみ突出している。しかもさらに加えて注目しなければならない解釈事実はその前の句(第十一句「當時侍金輿」)との関わり方である。いずれの解釈(現代でも)も、この第十一句は第十二句とはそれぞれ独立的様態叙述として終止形で締められる(すなわち第十二句と並立する二条の単文)か、乃至は両者が接続する構造(つまり接続助詞乃至接続詞で連結された重文の形)として解されている。ところが、『杜詩諺解』では第十一句が次の十二句を修飾する形を採っている。すなわち、「その時節に金輿を侍衛しをりし」[7]と連体形で締められ、「故物である石馬」を修飾している。つまり十一句と十二句は複文の構造となり、朝鮮の解釈者たちにとっては「石馬」がいつか設置された単なる遺物などではなく、粛宗に陪従した旅する忠情の偶像であり、その「獨」りそこに在って寂寥の情を漂わせる「石馬」と、同じ光景にあった忠情一途の杜甫の姿が重ねられた讃歌としての、あるいはオマージュとしての解釈である。杜甫に「一片丹心」の作品は多い。また、しかるがゆえに、朝鮮において杜甫の詩篇に認識された最大価値がその「忠情」であったことは『杜詩諺解』に対するこの両「序」でも明らかである。かく説く所以を十分に示すべき、その当為的検証がここでなされなければならないが、限られた紙面から別の機会に稿を改めての提示に回さざるをえない。ここではこの両者の「序」の原文を資料として文末に掲げるにとどめ、[8]要点のみを挙げる。

すなわち曹偉は「力めて淫艶華靡の習を去り、亂離奔竄の際に至りては傷時愛君の言、至誠より出で、忠憤激烈にして以て百世を聳動するに足らん。人を感發懲創する所以たるは實に三百篇と相ひ表裏たり。」[9]と評し、そしてまた金訢は「其れ愛君憂國の誠、中に充積して、發して詠嘆の餘に見はるるは、自ら容掩せず。後の人をして以て感發して興起すること有らしむ。此れ、以て三百篇を羽翼して、萬代の宗師たる所以なり。」[10]と讃えており、いずれも儒教「詩」論の原理に比定しながら、その忠情を以て詠者杜甫評価の中核に据える。ところが、一方振り返って韓国の方における処理を見るとまことに異様である。先掲「三、先行研究について」において「その歪さゆえに看過しえない著述[11]があり、小稿最終部「むすびに」において指摘する旨を述べたその「著述」である。すなわち、同篇第十一句「當時

侍金輿」諺解部の現代語翻字では

ㅌ 시절에 金輿를 시위하던〜(その時節に金輿を侍衛した〜)

となして、続く体言を修飾する形態を採りながら、解釈文では

ㅌ 시절엔 금수레를 모셨었지만(その時節には金の車に侍り仕えたであろうが)

と、ここで完結する一文すなわち一単文を仕立てあげてしまっている。そして逆接の構造のもとで第十二句の

옛 것으로는 石馬만이 남았을 뿐이라(昔のものとしては石馬のみが残っただけである)

に接続させていっている。まさに、諺解の解釈を完全に崩壊させ、なんらの根拠も示さず独断的に単文並列化（すなわち重文化）させてしまい、諺解の「いにしへがもの」すなわち「ひと(独)りへめぐ(経巡)りしいしめ(石馬)」との関係性を破壊してしまっている。これは誤認などではない、まさしく確信的歪曲である。この「歪曲」をしからしめた事情がしっかりと記されている。すなわち、第十二句の諺解部に対する該書著述者の解釈として

[獨] 을 [ho·을로이ᄉᆞ·ᄂᆞᆫ] 으로 언해하였다。 문맥상 [ho·을로이ᄉᆞ·ᄂᆞᆫ] 을 주제어로 보기는 힘들 것 같다。〔[獨]を[ひと(独)りへめぐ(経巡)りし]と諺解した。文脈上[ひと(独)りへめぐ(経巡)りし]を主題語とは見なしえない。〕

といった半可通な物言いもさることながら、なによりもここを「文脈上」と称して、著述者の狭隘な恣意的文意把握すなわち現代の杜詩享受者の勝手な判断によって、王朝の一大事業として展開された確信的結論としての「朝鮮杜詩学者たちの解釈」を大きく曲解し、その権威を毀損してしまっていることになる。

すでに触れたように、筆者は朝鮮杜詩観の原点が杜甫の忠情（義）であったと見ている。それは儒教分限主義に徹しようとした国家経営の核心的思想によって出づる芸術観であって、まさしく「善美兼備」[12]の儒教の原理主義的審美観とも言えよう。明確に爾後の検証テーマが浮かび出てきている。

【補説】

[001] 시내

現代では規模の小さい河川をも意味するが、『杜詩諺解』編纂と同時代の『訓蒙字会』は，시내，を，溪，となし、さらに，水注川曰溪小曰溪大曰澗，と説く。ちなみに，川，を，내，となす。

[002] 나

第一人称指示詞。+ㅣi(主格語尾)、+ㄹr(対格語尾)、+ㄴn(限定の係語尾)は多くの場合この指示詞に合し、それぞれ내nai(나+ㅣ)、날nar(나+ㄹ)、난nan(나+ㄴ)となる。

[003] 〈 〉

中に現代語の姿を示す。

[004] 〔本〕

用言の基本形乃至文節内の基幹語を示す。

[005] 終声ㄹが脱落

終声が，ㄹ，で終わる語幹（これをㄹ語幹と云う）は、次に/ㄴ/音が来るような環境においてはそのㄹが脱落する場合がある。（→凡例4）

[006] +ㄴ

用言の母音語幹(すなわち開音節語幹)もしくはㄹ語幹(すなわち終声ㄹの閉音節語幹)に付き、続く体言を修飾する語尾。その用言が動詞であれば過去時制となる。形容詞であれば時制に関わらず(現在のこととして)様子や状態を表す。cf. [015]、[034]。

[007] +ㄴ니

用言の語幹に付き、既定事実を原因・理由とする条件節を受ける接続語尾。〈~(する)わけで、~であるのだから〉。

[008] +예/+애/+에/의、+ㅔ/+ㅐ/+ㅞ/+ㄱ

地位・対象・場所あるいは時間や期日など限定条件を示す格語尾。

[009] +ㄴ다

ㄹ語幹を除く子音語幹に着いて、動詞の現在終止形を作る。

[010] 아

ㄹ語幹に打ち消しの用言語尾+디 di〈+지 ji〉(→次項)が着く場合、その語幹からㄹが脱落する。

[011] +디몯

㈜+디 몯ᄒᆞ다〈+지 못하다 ji moshada⇨ji motada〉

用言の語幹に付いて、動作・行為・行動などの不可能、あるいは状態や様相が一定程度に及ばないことを表す。+디 di は、それが着いている用言の打ち消しを意味する用言語尾である。

[012] /t/←/hd//dh//hs//sh/、また/k/←/hg//gh//、/p/←/hb//bh/。

現代語においては、実音声は(つまり発音時には)/h/音の前または後に有声音 /d(s)/、/g/、/b/が来るとそれらはそれぞれ/t//k//p/と無声化する。中期語においては確実な説は無く、無声化を思わせる部分も散見するが、基本的に無声化を想定せず、正音字をそのまま欧字に翻字する。

[013] +리로다

予想・推測あるいは意志を表す用言語尾。中期語詩文類に多用される。

[014] 지ㅅ/지ㅇ

㈜짓다 jisda〉。ㅅ語幹用言の一部では、+ㄴ n (語尾)が付くときはㅅ s が脱落し、次音節にㅇ øを置く。

[015] +ㅇ/+ㄴ

形容詞の子音語幹(ㄹ語幹を除く)に付いて、様子や状態を表す。動詞の場合は過去時制を表す。cf. [006]、[034]。

[016] +로다

指定詞またその否定形にに付き、感嘆を含意する終結語尾。すなわち、体言に付いて驚愕・感嘆を表す。子音語幹体言には+ㅣ로다。また否定形は+ㅣ아니로다~にあらざるかな。cf. [024]。

[017] +ㄴ/+ㄷ/+ㄴ/+ㅇㄴ/+ㅇ

体言あるいは他の語尾に付いて限定あるいは話題提示を表す係語尾。主格体言に付くこともあるが、主格を表しているとは限らない。係助詞「~は」をもって邦訳する。

[018] +ㄱ

属格(時に与格)体言語尾。子音語幹に付き、その子音字が同語幹から離れ、次音節初声となり、この ,+ㄱ ㅌi, と合する。邦訳文語文では基本的に文語属格助詞 ,が, で受け、,~が, と訳出する。→凡例⑤。cf. [057]。

[019] +ㅣ/+이

主格語尾。母音語幹および母音語幹漢字には，+ㅣi。子音語幹ではその子音(終声)字が同語幹から次音節へと離れ(次音節の初声となって)、この，+ㅣi，と合する(ex. 0046 귀것⇨귀거시)。また子音語幹漢字には，+이，(ex. 牛斗星이、南國이)。→凡例5。邦訳文語文では基本的に主格助詞を用いないか、あるいは主格助詞，の，で受け、，〜の，と訳出する。

[020]　　+고

用言語幹に付き、文の中止の形を表す。邦文では特に用言の連用形単独でこの意味が表される。cf. [039]、[043]。

[021]　　뎌와피리

피리piriはここでは，竽，の訳語とされており、巻六の「草堂」でも同様であるが、巻十一の「麗人行」では，蕭ᄀᆞ，(纂註は，簫[縦の単管]に作る)、巻十五「城西陂泛舟」では，簧，の訳語、巻十四「七月一日題終明府水楼」では，簫，の訳語としていて、いずれも縦の吹管楽器である。縦か横か不明の、単に，管，とする作品(例えば巻十五「陪王使君晦日泛江就黄家亭子」)では横笛の，뎌diə，と縦の，피리piri，を併示している。吹管楽器においては縦か横かは一定の意味を有していたと考えられる。，피리/piri/，はもともと漢語，篳篥，の音写に由来するが、後代においては総じて訓化して，ふえ，の意に用いられた。

[022]　　+와／+과

母音語幹に付いて並列の体言語尾。通用形態は、母音語幹体言+와ᄀᆞᆫ다 ɸoagʌdda ／子音語幹体言+과ᄀᆞᆫ다 goagʌdda〜が如し。ただㄹ語幹の場合は揺れがある。また、韻文あるいは口述文では+와／+과は省略もありうる。

[023]　　+히

状態や様相を表す語に付いて次の用言を修飾。邦文では形容詞・形容動詞の連用形として訳出する。

[024]　　+도다／+노다

動詞・形容詞・指定詞の詠嘆形。邦訳では(〜かな)等詠嘆の終助詞を用いる以外に、いわゆる係り結び表現(ぞ〜連体形、こそ〜已然形)も用いる。+도다(→0077、0128、0162、0177、0192、0224、0255、0382、0408)。cf. [016]。驚愕・感嘆を表す。子音語幹体言には+ㅣ로다iroda。また否定形は+ㅣ아니로다iɸaniroda〜にあらざるかな。

[025]　　+니

完了を含意する終結語尾。また、理由・原因を表す(あるいは後続で経過・結果文を示す)接続語尾。(+니ni〜ので、から、理由や原因を表す接続助詞／終助詞)。

[026]　　ᄋᆞᄆᆞᆯ며

終結において体言+ᄉᆞ,뎌isdʌniə で結び、本邦漢文訓読法の抑揚表現である，況や〜をや，に該当。体言+ㅣᄉᆞ,뎌は+니ᄉᆞ,뎌nisdʌniə にも。

[027]　　+ᄅᆞᆯ／+ㄹ／+ㅁᆞᆯ／+ᄋᆞᆯ／+ᄒᆞᆯ

目的格体言語尾。母音語幹には，+ㄹr／+ᄅᆞᆯrʌr，子音語幹には，+ᄆᆞᆯʌr／+ㅁᆞᆯɯr，。漢字語幹には，+ᄋᆞᆯɸʌr／+ᄋᆞᆯɸur，。

[028]　　+던

用言語幹に付き体言を修飾。過去の継続的な動作・現象を表す。

[029]　　ㄱ／이／뎌

指示代名詞、指示詞。이ɸi 接称これ、この。ㄱgɯ 近称それ、その、

かれ、(不可視域内の)遠称あれ。あの。뎌 die (可視域内の)遠称あれ、あの。

[030]　+ㅁ/+ㅁ/+ㅁ/+ㅁ/+ㅁ

用言の体言化語尾。用言を、その語幹に付けて体言化する。

[031]　+ㅏ셔/+ㄱ셔

用言語幹に付いて原因・理由や経時順などを含意する接続語尾。また、連用形(『コスモス朝和辞典』の云うところの第Ⅲ語基)앉아 ɸanjɔa+셔 siə と解して、原因・理由や経時順などを含意すると説明することもできる。

[032]　훤히

多様な意味概念の訳語である。本書『杜詩諺解』初刊本でこの訳語の対象となった杜詩原文篇首の該当漢語を挙げ、表にまとめることで、本件訳語の意味概念の感得に資したい(別表省略)。

[033]　+ㅗ니/오니

完了した行為・動作・現象を原因・理由とする条件節を作る接続語尾。+ㅗ니 oni は子音語幹に付き、その子音は ㅗo と合してその初声となる。ㄹ語幹ではその音節がㄹ로니に変じる。ㄹ語幹はその終声 ㄹr が ㅗo と合して로니となる。

[034]　+ㄴ

動詞語幹について、その動作・行為あるいは現象の進行している意味の連体の形を作る。すなわち続く体言を修飾する。cf. [006].

[035]　+ㅁ

用言を体言化する語尾(+ㅁ /+ㅁ)に付いて次音節において独立し、その用言概念に由る、あるいはその用言概念に起因する結果を次節で述べる。

[036]　層層인

元来中期朝鮮語においては層層ᄒᆞ다(形容詞)、日本語文語においては〈層層たり(形容動詞)〉である。したがってその連体形は層層ᄒᆞᆫとなるべきところ、本件『杜詩諺解』初刊本においては別表(省略)に掲げるようにその用例はいずれも層層인と体言語尾で受け、すなわち ‚層層, を体言として扱っている。であれば諺解の解釈に忠実に邦訳でも ‚層層, を〈層層の/層層たる状の〉と為すべきである。また別に ‚各層, という意味で、体言としての ‚層層, も用いられる。

[037]　+놋다

感動、詠嘆の現在ないし進行時制終結語尾。

[038]　+ㆍ로/+로/+ㅡ로

方向格体言語尾。また手段格語尾にも。

[039]　+고/+ㅣ니고

〜なるや、〜するや。㈜ +ㅣ니고 ɸingo。疑問を表す用言語尾。子音語幹への接続ではㅣn ɸin を省略することもある。cf. [020]。

[040]　+ㅣ다/+ㅏ다

〜き、〜なり、〜り〜かりき、〜たりき。過去時制を示す終止語尾。

[041]　(動詞連用形)+ㅣ다

〜(し)をり。〈〜(して)いる。〉。動詞に付いて、その行為や動きが完了した後の状態の継続を表す。

[042]　+도소니

用言語幹に付いて〈〜であったわけで、〜ということで、〜(する)と〉。接続語尾。先行する+돗と後続の+ㅗ니の二重語尾の構造を有

し、特に驚きや感動を含意する場合がある。

[043]　+오

用言語幹に付き、文の中止の形を表す。邦文では特に用言の連用形単独でこの意味が表される。cf. [020]。

[044]　ᄒᆞ다／하다／(ᄒᆞ다)

形容的漢字語や名詞に付いて形容詞化し、行為的ないし動的名詞に付いて動詞化する。ᄒᆞ다 はᄒᆞ오다(『杜詩諺解』には見えない)の縮約形と見ることもできるが、基本的には二重語尾のうち先行語尾+ㅗに末語尾+ㅁや+ㅅsが付いた形で現れる。

[045]　+어ᄂᆞᆯ

用言の語幹に付き、特に疑問文において逆接条件を強調するような場合に用いられ〈〜であるはずなのに〉といった意味合いを持つ。また、後続する文の理由を表す条件節において、特にその理由を強調する場合に用いられ〈〜であるからして〉といった意味合いを持つ。

[046]　+ㅣ라

感嘆の意を含む終結語尾。時制は限らない。

[047]　+ㄹ세

主に「感受時での」感嘆の意を含む終結語尾。cf. [024]主に「発信時での」詠嘆との微妙な差異。

[048]　ᄒᆞ여곰

使役文を作る副詞。一般に+모ᄒᆞ여곰rohvoiegom と用いられて〈〜をして〜しむ〉の構造を採る。ex. 各各蒼生ㅇ로ᄒᆞ여곰環堵ᄅᆞᆯ두게ᄒᆞᆯ고〈各々蒼生をして環堵を設けしむるか〉各使蒼生有環堵「寄栢學士林居」巻七。

[049]　+ㄷㅣ아니

㈱+ㄷㅣ 아니ᄒᆞ다〈+지 아니하다〉。用言の語幹に着いて、動作・行為・行動などを為さない表現。+ㄷㅣ〈+지〉は、それが付いている用言の打ち消しを意味する用言語尾である。

[050]　+더ᄃᆞᆫ

重文構造において、実際には無かった事態や現象などを前文においてはすでに完了しているものと仮定／仮想し、後文においてその結果を予想するために、前文を条件節化する用言語尾。

[051]　+ㄹ

用言の母音語幹(すなわち開音節語幹)もしくはㄹ語幹(すなわち終声ㄹの閉音節語幹)に付き、続く体言を修飾し、未来時制となる。cf. [006]。

[052]　ᄃᆞᆫ다 dʌnnida⇑正書法ᄃᆞᆫ다 dʌdnida

朝鮮語において、実音声ではnに先行するdはnとなるが、音韻上はあくまでもdとされる。大韓民国の国語表記規則(正書法)では音韻規則に則って表記する。

[053]　終声の音節離脱

中期朝鮮語では、子音語幹の体言基本形が次音節において母音に連なる場合にはその最終子音が語幹から離脱し、次音節においてこの母音に付き、一音節をなす。すなわち、最終子音の次音節における初声化である。用言の子音語幹の場合も同様である。cf. [008]。

[054]　+나

逆接の用言語尾。邦訳では〈〜であるが、〜するけれども〉等となす。

[055]　+며

用言語幹に着き、文の中止の形を表す。邦文では特に用言の連用形単独でこの意味が表される。cf.［020］、［039］、［043］。

［056］　+샤／+셔

用言の尊敬形を作る語尾。

［057］　+의

～が、～の。漢字語及び母音語幹に付く属格語尾。cf.［008］、［018］。

［058］　+ㅣ아니다／+이아니다

指定詞．+ㅣ다 ida／+이다 φida なり、（次項）の打ち消し形。

［059］　+ㅣ다／+이다

～なり。（～である）。指定詞。

［060］　+노라

第一人称叙述の形をとり、特に格式張って（自己の）行為・動作を断言する。未来のことであれば強い意志の表現ともなる。

注

（1）成澤勝「朝鮮における集千家註系杜詩について」（『日本中國學會報』第五十集、日本中國學會、一九九八）

（2）命檜嚴住持僧卍雨移住興天寺、仍賜衣、令禮賓供三品之廩。卍雨及見李穡李崇仁、得聞論詩、稍知詩學。今註杜詩、欲以質疑也。（『世宗實錄』巻一百（世宗二十五年四月壬子（二七日））

（3）沈慶昊「纂註分類杜詩解題」（影印『纂註分類杜詩』以會文化社、一九九二、ソウル

（4）命購杜詩諸家註于中外。時令集賢殿叅校杜詩諸家註釋會粹爲一、故求購之。（『世宗實錄』巻一百（世宗二十五年四月丙午（二一日））

（5）녯거슬·올로잇ᄂᆞ·ᄂᆞᄂᆞᆷ·리로다（「玉華宮」諺解第十一句）

（6）周采泉『杜集書錄』（上海古籍出版社）下、六六三～六六五頁

（7）ㅋ時節에金輿를侍衛ᄒᆞ더（「玉華宮」諺解第十二句）

（8）詳論は稿を改め、ここでは文末に原典影印資料のみ掲げて置く。

（9）力去淫艶華靡之習。至於亂離奔竄之際。傷時愛君之言。出於至誠。忠憤激烈。足以聳動百世。其所以感發懲創人者。實與三百篇相爲表裏。（『梅溪集』巻四「杜詩序」（句点は原籍による））

（10）其愛君憂國之誠。充積於中。而發見於詠嘆之餘者。自不容掩。使後之人。有以感發而興起焉。此所以羽翼乎三百篇。而爲萬代之宗師也。（『顔樂堂集』巻之二雜著「翻譯杜詩序」（句点は原籍による））

（11）李賢熙・李浩権・李鍾默・姜晳中共著『杜詩외 杜詩諺解⑥』（新丘文化社、ソウル、一九九七）

（12）子謂韶、盡美矣、又盡善也。謂武、盡美矣、未盡善也。（『論語』「八佾」）朝鮮におけるこの善美兼備の儒教審美観については筆者が初めて「美と善」（『基礎ハングル』6号三修社）において指摘した。

【付言】杜詩にご関心の各位におかれて、朝鮮での解例を覗き見たい篇首がお有りであれば、なにとぞご指定いただきたい。いずれの方にでも、同篇首諺解の詳細な分析検証結果をお届け申し上げる。以て筆者の修行研鑽の蓄積と致したい。

曹偉「杜詩序」

杜詩序

詩自風騷而下。盛稱李杜。然其元氣渾茫。辭語艱澁。故箋註雖多。而人愈病其難曉。成化辛未。上命弘文館典翰臣柳允謙等。若曰。杜詩諸家之註詳矣。然會箋繁而失之謬。須溪簡而失之略。衆說紛紜。互相牴牾。不可不研覈而一。甫其纂之。是廣摭諸註。芟繁釐枉。地里人物字義之難解者。逐節略疏。以便考閱。又以諸語譯其意旨。向之所謂艱澁者。一覽瞭然。書成繕寫以進。命臣序。臣竊惟詩道之關於世教也。大矣。上。而郊廟之作。歌詠盛德。下。而民俗之謠。美刺時政者。皆是以感發懲創人之善惡。此孔子所以刪定三百篇。有無邪之訓也。詩至六朝。極為浮靡。三百篇之音墜地。子美生於盛唐。能挾剔障塞。振起頹風。沉鬱頓挫。力去淫艷華靡之習。至於亂離奔竄之際。傷時愛君之言。出於至誠。忠憤激烈。足以聳動百世。其所以感發懲創人者。實與三百篇相為表裡。而指事陳實。殆稱詩史。則豈後世朝風詠月。刻削性情者之所可擬議耶。然則 聖上之留意是詩者。亦孔子刪定三百篇之意。其嘉惠乘學。挽回詩道也至矣。三百篇。一刪於孔子。而大明於朱氏之輯註。今是詩也。又曰 聖上而敦揮馬學。詩者。苟能模範乎此。臻無邪之域。以抵三百篇之藩垣。則豈徒制作之妙。高出百代而已耶。我 聖上。溫柔敦厚之教。亦將陶冶一世。其有補於風化也。為如何哉。成化十七年十二月上澣。承訓郎弘文館修撰知製教兼經筵檢討官春秋館記事官承文院校檢臣曹偉謹序。

金訢「翻譯杜詩序」

翻譯杜詩序

惟 上之十二年月日。名侍臣著。司詩教於性情。關於風教。其善與惡。皆足以勸懲人大哉。詩之教也。三百以降。惟唐最盛。而杜子美之作。為首上。溯風雅。下。蹴沈宋。集諸家之所長。而大成焉。詩至於子美。可謂至矣。而詞嚴義密。世之學者。患不能通。夫不能通其辭。而能通其旨者。未之有也。其譯以諺語。開發蘊奧。使人得而知之。於是。臣某等受命。分門類聚。一依舊本。雜采先儒之語。逐句略疏。間亦附以己意。又以諺字譯其辭。俚語解其義。向之疑者。釋至者。通子美之詩。至是無餘蘊矣。凡閱幾月。第一卷先成。繕寫投進。以聞。 睿裁。上賜覽。曰。可令平章。仍命臣序之。臣於子美之詩。鹵莽矣。減裂矣。何能措一辭於其間哉。然。待罪詞林。不敢以不能為辭。則謹拜手稽首。而言曰。臣竊觀子美情極憂時。詩

古今。以倜儻之才。懷匡濟之志。而值干戈亂離之際。顛沛蒙塵。奏峽之間。羈旅艱難。感激烈山川之流峙。草木之榮悴。禽鳥之飛躍。千彙萬狀。可喜可愕。凡接於耳而寓於目者。雜然有動於心。一於詩焉發之。自朝廷治亂之跡。下至閭巷細碎之故。咸包括而無遺。觀盤人行則知寵璧之盛。而明皇之侈心露。感於內讀兵車行則知防戍之久。而明皇之驕兵窮黷。於外。北征書。一代之事。而與雅頌相表裏。人哀紀詠賢之出處。而與傳表相

上下。謂之詩史。不亦可乎。而其愛君憂國之誠。充積於中。而魏見於來嘆之餘者。自不容掩。使後之人。有以感發而興起焉。此所以刪破無盡之書。一字而含無窮之味。雖老師宿儒。有不能得其門而入。況童蒙之好飛觀於八陣圖。一詩。待子瞻之夢而後定。則其他可知也。恭惟 主上殿下。潛心聖學。日御經筵。式經。詩史。靡不畢究。又能留意於詩道。有以世教而特命詞臣。肯譯子美之集。而千載不傳之秘。一朝瞭然。如指諸掌。使人人皆得逞其堂而睿其藏。如在。意子美之詩。晦而不明者。歷千有餘年而後大顯。子今豈非是詩之顯晦。與世道升降。而 殿下所以變捲前古。卓然百王。振起詩道。回世教之衰。亦可因是以仰窺萬一也。學者。於是。寄章句以網之。詩解以絕之。飫以詠歎。以抱其膏。以潤。以探其閫奧。而必以搜刻新異者。而以一飯不忘君為其心。則子美庶幾可尊。而融語之妙。聲律之工。將其林餘。爾將見。輝載之歌。大雅之作。

9784585394464

1923098030003

ISBN978-4-585-39446-4
C3098 ¥3000E

定価［本体3,000円+税］